

騷亂

史譚

井口朝生

井口朝生

そらんたん

騷乱史譚



騷乱史譚

一九九二年十月十五日 印刷
一九九二年十月二十日 発行

著者 井口朝生

発行者 深見兵吉

発行所 光風社出版

東京都文京区春日二の四の一

郵便番号 一一二

電話番号 〇三(五八〇〇)四四五二

FAX 〇三(五八〇〇)四四五二

振替東京八一二九一三

印刷 サンワード企画

製本 越後堂製本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えます
定価はカバーに明記してあります

1992 © ASAO IGUCHI Printed in Japan

ISBN4-87519-191-X C0093

騷亂史譚
目次

作者口上

ある忠勇義烈伝

セ

嘉吉騒動記

三

火焰天狗譚

吾

笛と弓

三

葦たばの城

二

雑兵往来

三

野州戦国異聞

一

異本陰徳太平記

二七

鳥居強右衛門

二〇四

奸雄記

三三

飛竜落つ

二四

袁彦武士道

二五

雑兵哀歌

二六

お伊与御寮人

三〇一

装幀——湯淺四郎

騷^{そう}
乱^{らん}
史^し
譚^{たん}

作者口上（まえがきに代えて）

この小説集は、南北朝抗争期から関ヶ原合戦まで、兵火大變の文字通り騒乱激動する時世におけるさまざまな人生群の実描である。小説としての虚構の部分に大小の差はあるが、いずれも信憑性のある史料に依拠して書いた。目次はだいたい年代順に配列してある。

ある忠勇義烈伝 ちゆうゆうぎれつでん

一

鮎食川あぐいの清流が走る名西山分なみとうざいさんぶんの奥谷に散在する村里へ、この地方一帯を領している豪族小笠原宮内大輔長宗ながむねの掟る一宮城からの急触れがあつた。小笠原氏とその勢力を隣接している藤井寺ふじいじの飯尾準人はんとし佑吉連の軍勢が、一宮城へ押し寄せるといふ情報があるので、各村の郷主たちはおのおのの勢力を総動員して、ただちに城へ詰めるようにといふことであつた。

百姓とも武士とも樵夫きしりや獵師とも区別のつかない恰好をした男たちは、山嶺をよじのぼり尾根を走り谷を伝わつて、それぞれ命じられている村里に辿りつくと、

「合戦じゃ、合戦じゃ」

と声を限りに怒鳴り廻つた。

深海を逆さまにしたような底抜けに明るい阿波の山河に、争乱をもちこんだのは細川氏である。

足利尊氏が政治的見地から瀬戸内海と四国を重視して、その経営のために細川和氏を阿波守に推挙し、細川定禪を讃岐へ送りこんだのは、いわゆる建武の中興とよばれる政治が始まってまもない

建武元年（一二三四）のことであつた。

細川氏は源氏である。源義家の孫義康が下野国足利荘に住み足利氏を称し、足利義康の曾孫義季が三河国額田郡細川荘に住んで細川氏を称したのだから、足利氏と細川氏は同族ということになる。

建武二年十一月、足利尊氏、直義兄弟は鎌倉において叛逆をおこした。細川定禪は鎌倉に呼応して、讃岐の鷺田荘に叛旗を挙げると、同国の託間氏や香西氏などを従えて守護舟木頼重を屋島に破り、備前へわたって京都へ進軍した。このとき阿波の板東、板西の武士たちも多くこれに従つたという。

しかし翌建武元年（一二三六）正月、足利軍は京都の合戦に敗れて九州へ敗走した。その途中、播磨の室津で評定を開き、捲土重来を期する策として細川和氏、頼春、師氏たち兄弟や細川顕氏、定禪など細川一族を四国へ派遣することにした。細川氏は、すでに縁故のある板東、板西の武士団に迎えられて阿波へ無血入国すると、土成の秋月城を軍府として、国内の平定にとりかかった。

阿波の守護小笠原氏をはじめ、諸豪族、武士たちは、重代相伝の領地を自衛するため、各地で新来者に抵抗した。国内に騒動がひろがった。

「皆のしよ、早う集まれ！」

小笠原長宗は角張つた日焼け顔でさげんだ。城主が口にする言葉ではなかった。

城主も城主らしくなかったが、一宮城の城門前の広場に集結した将士たちも、いっこうに軍勢らしくなかった。恰好はてんでんばらばらだった。殆んどのが、そのまま鎌を手に籠をかついで山仕事にでかけてもいいようであつた。頬かぶりもあれば、鉢巻をしているものもいたし、菅笠を

かぶっているやつもあった。とにかく一応は武装しているものの、脛すね当あたがなかったり、籠手こてをはめていなかったり、よろいの草摺くすりだけの雑兵もあった。暑い時候とはいえ、下帯一本の裸の背中に、太刀を背負っている男もいる有様で、まことにふしぎな軍勢といえた。

小笠原宮内大輔長宗が城門前にあらわれて軍勢を検閲した。三百数十人集まっていた。勢ぞろいすると、すぐ城を進発した。裏の建治山の南側山腹を通って、鬼籠野おろのに至り、そこから全軍一団となつて、神領盆地へ乱入した。

「大栗神社のご神領を侵すとは罰が当る、祟りがこわい！」

百姓兵たちが恐れおののいた。

「なんの、ひるむな！ 臆おそすな！ ご神領に住むやつばらといえども、細川に与力して一宮城の背後をうかがう敵じゃ。はばかりなくふみこめ、押せ押せ！ 切り取りはぎ取り勝手しだいじゃ」

小笠原宮内大輔長宗が声を励まして下知した。寄せ手と同様、平生は百姓や樵夫や木挽こびきや獵師りやうしである神領の住民たちが、生活を自衛するために、猛然と防戦反撃してきた。刀で切り結び槍を突き交す小戦闘が何カ処ところかで展開され、怒号喚声がおどろおどろしく白昼をつつんだ。

矢野村の百姓奎十きゆうじゅうの伴せがれせい八は、寄せ手の先頭で働いていた。生まれて初めて合戦場に身をさらしたのだが、十七歳という年齢が五体に血気をたぎらせていたのである。せい八はひどく長い青竹の先に刀をくくりつけた武器を、力まかせにふり回しながら、近づくものの、まわりのやつばらを片はしからなぎ倒し突き伏せた。息がきれ咽喉のどがからからに乾かわき目がくらみそうになつて気がついたとき、合戦はおわっていた。そしてさらに気がつく、せい八の目の前に、敵の武士と思われる老人が土下座していたのである。

「降参か!？」

せい八がねめつけると、白衣の老人は口のなかで何かぶつぶつ言つて、手を合わせた。せい八は味方の本陣へ捕虜を連行した。

小笠原宮内大輔は武士を従えて、木立の日かげに陣取つていた。

矢野村の郷主矢野孫左衛門が、せい八の直接の指揮者であつた。彼は孫左衛門にみちびかれて、宮内大輔長宗の前へすすんだ。この時になつてせい八は、自分が捕虜にした品よい顔だちの白衣の老人が、敵の大將格で大栗神社のえらい神宮の一人であることを知つた。

「おぬしの身命を孫左衛門から引き取つた。ただいまから侍に取り立ててやる」

小笠原長宗に褒賞され、せい八は武士たちの末席に加わつて食事を与えられた。眩しいほどの白米のめしを、せい八はこれまた生まれて初めて腹一ぱい食べたのである。そして郷主孫左衛門から矢野姓をもらい、名前を清八郎と改めることにした。

二

むかし文治二年（一一八六）、鎌倉幕府から阿波の守護に任命されたのは佐々木氏であつた。やがて承久三年（一二三二）におこつた朝廷と幕府の衝突いわゆる承久の乱のとき佐々木経高、高重父子は、朝廷方に味方して敗北滅亡した。

この承久の乱の際、中山道における幕府方の大將として戦功のあつた信濃の小笠原長清が、佐々木氏にかわつて阿波の守護に補任された。阿波に入国した小笠原氏は、長房ながふさのとき三好郡池田に大西城を築いて守護所にした。しかし池田が西に偏しているので小笠原長房の子長久のとき、四男長

宗を一宮に住まして阿波の東半国を統治させることにしたわけである。

この小笠原長宗が神領を侵し、一宮大栗神社の神裔といわれ神官でもある国造家の宮主宗成を討って、その分霊を一宮城内明神丸に奉祀すると自分が神官となって、このときから一宮氏を称するようになった。

かつて足利尊氏が叛逆をおこしたとき、後醍醐天皇を中心とする吉野朝廷つまり南朝方に応じて、阿波で兵を挙げたのは、池田大西城の小笠原阿波守義盛であつた。

同じころ、秋月城に軍府を開いた細川和氏の弟細川頼春は、その後、勝瑞城に本拠を移すと、吉野川流域平野の経営を着実にすすめた。やがて小笠原義盛も、累代の守護職はそのままにして国内の執政をつづけるという条件で、ついに北朝方の細川氏に与力してしまった。

かくして一宮城に拠る小笠原氏すなわち一宮氏は、阿波山岳の各地に蟠踞して南朝に味方する諸豪族の中心になったのである。

それらの事情は、矢野村の百姓せい八こと矢野清八郎が、一宮城の侍になってから、いつのまにか誰からともなく得た知識であつた。

ここにおいて、細川頼春の一宮城攻撃はいよいよ峻烈になった。細川の部将である飯尾隼人佑吉連が、一宮城に取りかかる準備として、同城とは指呼の距離にある八万城に布陣した。これに対して一宮氏は同族の一宮六郎二郎成光を、園瀬川をへだてた寺山に配置した。翌正平六年（一三五二）正月、激しい攻防戦があつて、一宮六郎二郎は敗退した。

細川氏の北朝軍は、この戦捷の余勢を駆って、北方から一宮城へじりじりと迫つた。その後一年間に東条合戦、新堂原合戦、中津峯合戦と激しい攻防がくりかえされた。

一宮城の侍矢野清八郎は、どの合戦にも、常に青竹柄の大薙刀をふるい、味方の先頭に立って働いた。特に拔薙けの功名を心がけるのでも、かぶと首をねらうのでもなく、ひたすら身を挺して先を薙け、味方の士気を鼓舞した。

「きょうもまた青竹の大薙刀がまっ先を薙けていた」合戦のたびに、そんな噂が交された。そして城主小笠原長宗からは「忠勇義烈の士である！」と最高の讃辞をうけた。若侍は、こういう褒め言葉に感動発奮して、さらに働くというぐあいであった。

そのころ足利尊氏、義詮父子と尊氏の弟足利直義との間に紛争が生じた。尊氏は一時的に南朝と和して、弟直義を追討しなければならなかった。

その際に正平七年閏二月、南朝の諸将が、京都にいた足利義詮を攻撃するという事変がおこった。義詮はあやうく近江へ遁走したが、当時上京して、義詮に近侍していた阿波の守護細川頼春は戦死し、頼春に従っていた小笠原義盛もこれと運命をともした。

この事変いわゆる観応の擾乱後、新田義貞、北畠顕家の戦死、後醍醐天皇の崩御などと不幸悲運がつづいて、すっかり衰微しかけていた南朝方が、いささか威勢をもちかえした。

阿波では、北朝軍の総帥ともいうべき細川頼春の戦死により、菅生氏などの諸豪族が、祖谷山や木屋平など山間の各地で、南朝方に与力して兵をあげるということがあった。

しかし天下の形勢は、必ずしも味方に有利とはいえないことを、一宮城の矢野清八郎はひしひしと感じていた。かんじんの吉野山中の朝廷が、いっこうにふるわないようだったし、第一、命令伝達や情報交換の連絡さえ、しだいに不便になっているようであった。

阿波の山岳からの連絡路は、小松島浦から和泉の堺を経て、吉野に至るのであるが、その海路を

仲介したのは、阿波海賊衆で、それには伊島の小笠原刑部、沼島に小笠原美濃というぐあいに一宮氏の一族がいたのだが、北朝方の計略により討伐され、紀伊水道の制海権は、いつか北朝方にうばわれていたのである。

それどころか同じ時期に、小笠原長宗が宮内大輔と一宮城を嫡子成宗にゆずって隠退したことは、ひそかに勝瑞城と和睦するための下準備らしいという疑惑すら囁かれて、矢野清八郎を慨嘆させた。若侍は生まれ在所の矢野村を訪れて、さらにまた意外なことにもぶかった。里の辻で見かけた板碑に、北朝年号があつたのである。板碑というのは、鎌倉のむかしからつくられていた一種の供養碑で、現今の木製卒都婆そとばの前身のようなものであり、阿波では青石とよばれる緑色片岩が多くこれに用いられていた。その供養碑に北朝の年号が刻まれていることは、とりもなおさず、矢野村がいつのまにか敵方の支配下になっている事実を示していた。清八郎は憤激した。その足で郷主屋敷へ押しかけて、孫左衛門を罵倒してやりたかつた、いや背信を責めて張りたおしてやりたいくらいであつた。

清八郎はさつそく報復を思い立つと、南朝年号を刻んだ板碑をかついでは、敵方の領分深くふみ入り、それを建てて廻つた。

一宮の新城主小笠原宮内大輔成宗は、清八郎の忠勇義烈を、いたずらに敵方を挑発する行為としてよろこばなかつた。たまたま、いままで北朝軍に属していた木屋平の三木氏が、改めて南朝方として立つに至り、与力を命じて清八郎を木屋平へ派遣した。若侍の血気が迷惑で、ていよく一宮城から追い払つたのである。

三木氏は阿波忌部氏の末裔といわれ、四国の秘境とうたわれる阿波の開かずの山祖谷につらなる山間の木屋平に、古くから伝わる豪族であつた。

清八郎は三木屋敷で、客分として厚遇されたが、与力にきたといつても、のどかな山村には、血気の若侍が青竹柄の薙刀をふるつて働くような事態はまるでおこらなかつた。

安穩の日々にいいかげん退屈したころ、やはり南朝方の種野山の小屋平弥三郎から急使が駆けつけた。秋月城の敵勢から、近日中に押しかけるといふ挑戦状をうけとつたので、加勢してほしいという依頼である。

清八郎は請われるままに、五十人ばかりの三木の加勢をつれて、種野山へでかけた。

約束の日時、小屋平勢三百余人は申し入れのあつた吉野川本流の天神浅瀬あたりの川岸へくりだして待機した。

まつまもなく秋月勢が、やかましく叫び声をあげながら駆けおりてきて、対岸の河原に布陣した。一見五六百ほどらしい味方の倍の敵であつた。ただしこの場合も、双方ともに軍勢というより群衆とよびたいような、喧嘩支度のおかしな集団であつた。

秋月勢から指揮者の騎馬武者がすすみでて、騎馬を流れへ三四間やおら乗り入れたところで、大音声をあげてこちらへよびかけた。

「すぐる延元元年、秋月に軍府を開府してこのかた、細川守護家に従う篠原重太夫の家人うまのすけが、過日種野山におもむいたおりにうけた乱暴狼藉の数々は勘弁しがたい。秋月勢すべての恥辱